様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３７１０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００９００

研究課題名（和文）留学生と日本人学生の多文化間共修による食育英語のCLIL:ニーズ分析と教材開発

研究課題名（英文）CLIL for Food Literacy through Multicultural Cooperative Learning by International and Japanese Students: Needs Analysis and Materials Development

研究代表者
津田　晶子（TSUDA, AKIKO）

中村学園大学・栄養科学部・准教授

研究者番号：３０４６２０８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2019年度から3年計画で、外国語教員（英語）と専門教員（調理学、栄養学）が協業し、「食育英語のCLIL」を開発した。2020年度に「福岡県における外国人留学生の食育に関する実態調査」を実施し、県内の高等教育機関35校のうち24校（回収率68.6%）から解答があり、　①長期間の留学生が多い　②アジア圏内からの受け入れが多い　③外国人留学生への食事の対応や、食育の機会がない学校が多いことが分かった。2021年度に、質問紙調査を踏まえ、九州大学の共創学部で学ぶ日本人学生と外国人留学生を対象に「食と文化」セミナーを「食の多文化共生」をテーマに実施し、事前調査、事後レポートを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コロナ禍の中、「孤食」に陥りがちな外国人留学生、日本人留学生の食生活に関する調査をした。また、調理学、栄養学、語学の観点から、「食と文化」のオンラインセミナーが実施できた。学校給食の恩恵がなく、一人暮らしの多い大学生にとっては、「食生活」は心と身体の健康を維持する上で非常に重要である。このCLILの食育英語プロジェクトの特色は、「語学教員」と「専門教員（栄養・調理）」が協業していることにある。学生が家庭科や食育で学んできたContentについて、英語の語彙表現、文法を参照しながら、「食と文化」のオンラインセミナーの実施において留学生と日本人学生がディスカッションする場を取り入れることができた。

研究成果の概要（英文）：This study involved a collaboration between foreign language teachers (English) and specialized teachers (Culinary Science and Nutrition) to develop a "CLIL for Nutrition Education in English" as a three-year program from 2019. In 2020, we conducted a "Survey on Nutrition Education for International Students in Fukuoka Prefecture" and received responses from 24 of 35 higher education institutions in the prefecture (68.6% response rate). The responses revealed that 1) there is a large number of long-term international students, 2) many are from within Asia, and 3) many schools do not provide meals or opportunities for nutrition education to international students. In 2021, based on the questionnaire survey, a "Food and Culture" seminar was conducted for Japanese and international students at the School of Interdisciplinary Science and Innovation, Kyushu University, under the theme of "Multicultural Conviviality of Food," and the pre-survey and post-survey reports were analyzed.

研究分野：外国語教育

キーワード：CLIL　食育　栄養英語　多文化共生　フードダイバーシティー　ニーズ分析　留学生　教材開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2005 年に食育基本法が制定され、基本的施策の一つに「食品の安全性、栄養その他の食生活に関する調査、研究、情報の提供及び国際交流の推進」がある。日本の大学のグローバル化により、日本人学生と留学生が共に居住する国際寮も増え、大学内の食の国際化に応じて、英語を使用した大学での食育のニーズが増えている。

本研究の調査対象は福岡県内の大学・大学院に在籍する留学生である。福岡県は、東京、大阪に次いで、留学生受入数が多く、また、留学生受け入れ数全国第 5 位の九州大学を擁している（「外国人留学生状況調査」、日本学生支援機構、2015 年）。県内にはモスクがあり、マレーシアやインドネシアなどのイスラム教圏からの留学生も多く、豚肉、アルコールを禁じるイスラム教の教義に従った食生活を行っている。福岡市内には福岡市国際会議場があり、福岡市の国際会議件開催件数は 7 年連続日本第 2 位で（「日本の国際会議開催研修」、日本政府観光局調査、2015 年）、ヴィーガン（完全菜食主義者）やハラルミール（イスラム宗教食）、コーシャーミール（ユダヤ教向け宗教食）を必要とする外国人研究者の来訪も多い。しかしながら、栄養士養成校である中村学園大学に所属する研究代表者らの共同研究「世界の食文化を巡る異文化間コミュニケーション－福岡を例に」（2014 年～2016 年）によると、海外の来訪者の多様な食文化によるニーズについて、ホテルやサービス業従事者、ホストファミリーが、単なる個人の食の嗜好と誤解し、対応が遅れている実情が明らかになった。

本研究では「留学生は日本の食生活上のコミュニケーション上でどのような問題に直面しているか」について調査し、その分析結果を基に、専門教員と英語教員がそれぞれの視点から協業し、「グローバル化を目指す日本の大学で必要な食育は何か」を調査、分析し、日本の大学における食育英語のモデルとなるプログラムを構築する。

２．研究の目的

本研究の目的は、ニーズ分析を元に、外国人留学生と日本人学生が共修できる日本型食育の CLIL プログラムを構築し、得られた知見を共有することで、大学のグローバル人材の育成に貢献することである。カリキュラム開発において、既存のプログラムを評価し将来のプログラムを計画するのに、ニーズ分析が有益であるとされる。（Richards, J. 2000, Curriculum development in language teaching. Cambridge: Cambridge University Press.）　日本の大学の現状では、栄養学や調理学の専門教員と英語教員間での協力体制がないことが明らかになっており、大学で国際的な視点で食育を推進するためには、専門教員と英語教員との協業による教育研究が喫緊の課題である。（「地域の国際化に貢献する栄養士養成のための ESP:ニーズ分析と教材開発」（科研費基盤研究 23520736，津田晶子、平成 23 年度～平成 25 年度）

本研究では、留学生と日本人学生のための食育英語のニーズ分析から CLIL プログラム・教材開発までの一貫した研究の基盤を確立するため、英語教員（研究代表者）と各分野の専門教員が連携して研究を進めた。

３．研究の方法

（1）初年次である 2019 年度は、小学校の栄養教諭、大学の栄養士、イタリア人大学教員、カナダ人英語教員、韓国人大学教員に、自身がこれまで受けてきた食育と、日本人と外国人の大学生がともに学ぶ食育の試みについて聞き取り調査を実施し、外国人の長期居住者が知らない日本語（調理器具や野菜の名前など） について、また、日本式の給食への意見などについて聞き取ることができた。 多文化間教育の教材開発の事例研究として、多文化社会であるイギリス（異文化間コミュニケーション）とオーストラリア（CLIL）で世界各国の大学教員と一 緒に教材とプログラム開発をするワークショップに参加して、実際に作成した教材をもとに、模擬授業をした。

（2）３年計画の２年目である 2020 年度については、①留学生向けの食育プログラム構築のために、福岡県内の大学・短期大学・高等専門学校を対象とした「外国人留学生の食育に関する実態調査」の実施と②令和３年度に実施する「留学生と日本人学生のための食育セミナー」開催に向けた先行文献研究と CLIL 教材とアクティビティーの開発である。②については、各自、専門教員、語学教員の立場から研究を進め、定期的に会議を開催し、情報交換に努めた。

（3）最終年度である 2021 年度前期は、これまでの調査結果を元に、九州大学共創学部において、外国人留学生と日本人学生がともに食育を学ぶオンラインセミナー 「健やかな大学生活のための食育： 多文化共生の視点」を実施した。

４．研究成果

（1）2019 年度の成果として、観 光九州アカデミア第 14 回研究会において、「九州・沖縄の郷土料理の日英教材:食のグローカル人材育成を目指して」を報告した。

（2）前述①の調査については、福岡県内の大学・短期大学・高等専門学校の 35 校に対して調査依頼をし、回答が得られたのは 24 校であった（回収率 68.6%）。11 校からは 回答が得られ

なかったが、新型コロナウイルスの影響による緊急事態宣言発令と調査依頼時期が重なり、各校がコロナ禍における業務体制の整備対応に追われていたことが考えられる。 外国人留学生の受け入れ期間については、全体の 75.0%で「長期（1 年以上）」の受け入れをしており、ほとんどの大学で男女ともに 「20 歳代」が最も多い年代であった。外国人留学生への食事対応を行っている学校は少なく 12.5%に留まり、行っている食事対応は「ハラル」が 33.3%、「ベジタリアン・ハラル両方」が 66.7% であった。留学生への食育を実施している大学は 2 校のみであり、実施している内容として「留学生向け料理教室」、「ランチチャット」が挙げられた。このことから、福岡県の大学においては「留学生に対する食育」が未対応であることが明らかになった。各大学が希望する外国人留学生向けの食育セミナーは、日本料理に関する内容や外国人留学生に対する体調管理に関する内容も挙げられた。

（3）事前に学生へ質問紙調査を実施することで学生のニーズ分析をし、事前に九州大学でフィールドワークをした結果、①九州大学の学生は日本全国から集まっており、福岡市内に住みながらも、福岡の郷土料理に触れる機会が少ないこと、②コロナ禍の「孤食」で、多くの学生の自分の食習慣について不安な気持ちを抱いていること、③キャンパスが広大で、キャンパス内にはコンビニエンスストアしかなく、自炊を始めた学生がどのように調理をすればよいか悩んでいることなどが明らかになった。管理栄養士の大和からは「コンビニエンスストアで入手した食材を組み 合わせた健康的な食事、②調理師の松隈からは「世界各国の鍋料理」③英語教員の津田からは「英語のレシピの読み方とフードダイバーシティー（食の多様化） につい、日英二言語のスライドを利用して講義をし、最後にグループに分かれて、参加者の郷土料理についてディスカッションする時間を設けた。このセミナーについては、参加学生への事前質問紙をもとにした「事前調査報告書」と、参加者の事後レポートを分析した「食と文化講座事後レポート・テキストマイニング分析」としてまとめ、Research Map 上で一般に公開している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 津田晶子	４．巻 Vol1
２．論文標題 ニーズ分析に基づくCLILプログラムと教材の開発：日本における食育の事例から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 J-CLILジャーナル	６．最初と最後の頁 70-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 津田晶子
２．発表標題 異文化間教育の観点からみた大学生と留学生の食育
３．学会等名 異文化間教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 津田晶子、大和孝子、松隈美紀
２．発表標題 健やかな大学生活のための食育：多文化共生の視点から
３．学会等名 九州大学共創学部レクチャーシリーズ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 留学生と日本人学生がともに学ぶ食育英語のCLIL
２．発表標題 津田晶子、仁後亮介
３．学会等名 日本CLIL教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 津田晶子
２．発表標題 多文化間共修のための食育英語のCLIL:郷土料理を世界へ発信するために
３．学会等名 言語教育エキスポ
４．発表年 2021年

１．発表者名 津田 晶子，仁後 亮介
２．発表標題 日本の高等教育における食育英語のCLIL
３．学会等名 大学英語教育学会東アジア英語研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 津田 晶子，仁後 亮介
２．発表標題 食を通じたグローバル人材育成を考える：九州を例に
３．学会等名 グローバル人材育成教育学会第 8 回全国大会・第 1 回国際遠隔会議
４．発表年 2021年

１．発表者名 Akiko TSUDA
２．発表標題 Developing CLIL Program for Japanese Food Culture
３．学会等名 Trends in Language Teaching Conference 2017
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

福岡県における外国人留学生の食育 に関する実態調査 https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/234104/deed69feb9046ffae4f516d485865eeb?frame_id=625733 外国人留学生と日本人学生が共に学ぶ食育 CLIL：ワークショップ案 津田晶子 J CLIL;ニュースレター Vo8 32-33 2022年2月 「九州・沖縄の郷土料理の日英教材:食のグローカル人材育成をめざして」 津田晶子 観光九州アカデミアVol11　p.3 2019年

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松隈　美紀 (MATSUGUMA MIKI) (40259669)	中村学園大学・栄養科学部・教授 (37109)	
研究分担者	大和　孝子 (YAMATO TAKAKO) (70271434)	中村学園大学・栄養科学部・教授 (37109)	
研究分担者	仁後　亮介 (NIGO RYOSUKE) (20565767)	中村学園大学短期大学部・食物栄養学科・講師 (47118)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関